

縞 「ねえ、虎さん、夏目漱石って人が書いた『ころ』の奥さんと御嬢さんが住んでいる家には床の間と違い棚があるだろう？それって元武士階級の家を戦争未亡人が買ったってことかい？」

虎 「そうだな。女が没落した士族の家を買えたってこと。女の不動産売買が法律で規制される前だからできた。しかし軍人の妻はしっかりしているね。大きな屋敷は維持費用が掛かるから、小さな家買い替えて、主人用の室に婿を入れて、将来の基盤を作ろうとしたんだから」

縞 「えっ！婿なの？下宿人じゃなかったのかい」

虎 「そりゃ口実さ。婿を探していますなんて言って、変なのに来られちゃ困る。面接で一次選考を通過した先生は、試用期間中に国元の様子を聞かれてこれも合格。将来の家を担うホープとして期待された。ここまでは奥さんの目に狂いはなかったね」

縞 「狂いはあったよ」

虎 「どこに？」

縞 「だいたい女の思い通りになるようなおとなしい男を婿に選ぼうとするのがいけない。トラブルもない代わりに発展もない」

虎 「しかし度胸があり過ぎて、大冒険して財産を食いつぶされても困る。先生の場合は銀行の利子だけで暮らせるから、問題ない」

縞 「それって頼もしいのは金で、人格じゃなかったってことでしょ。独立心の将来性を買ってほしいね」